

平成 26 年度「島嶼学概論 I」硫黄島研修レポート

鹿児島大学大学院人文社会科学専攻
博士前期課程 1 年 畑山悠希

1. フェリーみしま（交通）

鹿児島と三島村（鹿児島県鹿児島郡三島村）を結ぶ村営船「フェリーみしま」（約 1196 トン、最高 19.1 ノット、全長 89.5m、定員 200 人）は、人とモノ（牛も含む）と生活を運ぶ。

この日の船内は、いつにも増して賑やかだったことだろう。鹿児島市の子どもたちとその保護者らが私たちと同じ 7 月 5 日（土）～6 日（日）の日程で硫黄島を訪れ、自然やギニアの楽器「ジャンベ」を体験するツアーが組まれていた。三島村を語る上で、若年層の交流人口の多さは決して外せない。このことについては、後述する。

フェリーが波の穏やかな錦江湾から外洋に出る前、私たちの案内人を務めて下さった三島村役場定住促進課の日高真吾さんから、今回の硫黄島研修に係るガイダンスを受けた。この時はじめてもらった行程表を見ると、視察行程がギッシリと記されていた。校長先生、看護師さん、民生委員兼漁師さん。これからお会いする方々からどのような話を伺うことができるか、俄然たのしみになってきた。



操舵室に案内してもらうことができた。村民の方々の生活の足である「フェリーみしま」は、公的な補助を受けながら運航しているものの、年におよそ 3 億円の

赤字である。それにあと 2 年で、新船に役目をバトンタッチする必要があると説明してもらった。

舵をとるハンドルを、操舵室の中央に発見。安永浩一船長はこれを握ってはおらず、静かに海を見つめていた。自動操縦中の船内は、慌ただしかった出航前とは対照的なのだ。「船長さんは今、何を考えていますか？」と尋ねてみた。「…え？」と当惑顔で聞き返された。私はしばしば、質問の仕方がまざかったかなと冷や汗をかきそうになる。風のこと、波のこと、その日最適な港へのアプローチ、戻りの航程につき考えを巡らせていらっしやうだ。どうりで眼光が鋭かったわけである。

三島村は、長年の悲願である「本土への 1 日 1 便（運航）体制」実現化に動いている。現行だと鹿児島～竹島～硫黄島～黒島（大里・片泊）の区間距離 153 km、所要時間約 6 時間の「三島航路」を 2 日間に分けて往復する¹。すなわち、三島村民がフェリーで本土に行けるのは月に半分ほどなのである。これにつき、村民の利便性向上及び域外客による新たな航路需要の創出のため、黒島（片泊）～枕崎の区間距離 56 km、所要時間約 2 時間の航路延伸発着を実現すべく、三島村と枕崎市でつくる「三島村新交通ネットワーク協議会」は、2010 年度から実証運航を実施してきた。南薩地区からの青少年研修やスポーツ合宿の誘致、鹿児島発枕崎着の 1 日クルーズ実施などにより、利用者 1 割増が報告されている²。大山辰夫三島村長は「今年はこの新航路が、国庫補助航路の認定を受けるための最大の正念場」であると位置づけ、「国も財政にゆとりがない時代ですが、いつでも行ける、いつでも帰れる交通にするために、本村の海上に国道をとの理念から、新航路の実現に向けて、いっそう努力しなければならぬ」と述べている³。

「国庫補助航路」とは何か。正式には「補助対象航路」といい、離島航路⁴のうち、人口減少等を主な原因とする利用者の減少により航路事業の継続が困難な状況となっているものの、離島住民の足として、また、生活物資の輸送手段として非常に重要な役割を担っていることから、その維持のため国から補助金が交付される航路のことである（離島航路整備法第 1 条、第 2 条、地域公共交通確保維持改善事業費補助金交付要綱第 29 条）。国の補助を受けるためには、関係自治体、関係交通事業者、地域住民等を構成員とする地域協議会で「生活交通ネットワーク計画（離島航路確保維持計画）」を策定し、収支見込み計算書その他関係書類を添えて国土交通大臣へ申請をする必要がある（地域公共交通確保維持改善事業費補助金交付要綱第 33 条、第 36 条、第 45 条）。

いわゆる「バラマキの時代」、「中央」は、おなかを空かせ口を開けてピーピー鳴く「地方」に餌を運ぶ親鳥のような役割を果たしてきた。そして飛べない地方が数多く生じた。

現在、申請につき地域協議会設置を義務付ける、地域活性化を目的とした支援スキームがいくつも

¹ 月によるが 3～5 日ほど運航が無い日もある。

² 南日本新聞 2011 年 2 月 20 日付

³ 広報みしま No.500（2014 年 5 月号）

⁴ 離島航路整備法において「離島航路」とは、本土（本州、

北海道、四国及び九州をいう。）と離島（本土に附属する島をいう。）とを連絡する航路、離島相互間を連絡する航路その他船舶以外には交通機関がない地点間又は船舶以外の交通機関によることが著しく不便である地点間を連絡する航路をいう（第 2 条）。

存在する⁵。補助金を有効活用できる「説得力」を有する地方を積極的に支援する枠組みであり、その説得力が地域協議、行き着くところが「連携」である。地域協議会のメンバーは地方公共団体、関係事業者（あるいは地域の経済団体）、地元住民（アンケートやヒアリング、公聴会やパブリックコメント実施を含む）とされるケースが多く、当該支援事業がその地域で官民の両方から真に望まれることなのか、有効に活用できるネットワーク作りがなされているのか、そういった見極めのプロセスが明確な数値目標・実績に基づいた厳格なものとなっている。

地方分権改革に伴い、地方が自らの力でおこなわなければならないことが増え、それに要する専門性も格段に上がった。しかしながら、自治体レベルで政策形成と実務に専門性を発揮できる職員を確保するには限界がある。

2014年4月1日現在、三島村の職員数は48（うち船員15、用務員2。定員は52。）。村の総人口372人に比してどうであるかにつき、3島から成る三島村を維持・発展させていくには決して多いとは言えないだろう。今回の「本土への1日1便体制」実現化に携わっている職員の方々の御苦勞は相当なものであると想像する。この辺りについて何の聞き取りもおこなわなかったため、空想の域を出ないのだが。

2. 三島小中学校（教育）



竹島への寄港を経て、火山ガスが立ち上る硫黄島が間近に見えるようになった。蛍光黄の部分硫黄だ。

甲板から歓声をあげた。歓迎のジャンベ演奏を聞きながら、フェリーは褐色の港内に入って行く。

もう蝉が鳴いていた。港から三島小中学校までの10分足らずの道のりで私はすっかり汗ばみ、食べ物と衣類でギュウギュウ詰めのリュックサックの重みにへこたれそうになっていた。校門をくぐると、右手に昭和9年の噴火を伝える石碑。左手には大きな木陰があり、涼風を運んでくれた。

「かしこく あかるく たくましく」。こういった平仮名の語呂が良い校訓は、私の小学校にもあった。その当時は何と平易な言葉の羅列だと思っていたが、今の私には溜め息が出てしまうほどに訴えかけてくるものがある。

校長の柏木博之先生が迎えてくださり、ご自身が実際に足を運び撮って来られた硫黄島の写真を電子黒板で見せてくださった。（硫黄か珪石の）採掘

に用いる重機を運ぶため山肌に敷き詰められた石畳には、二筋の轍が刻まれていた。先人たちの黒々とした手足と、汗を想像した。

柏木先生が「日宋貿易で…」と口を開かれた瞬間、中学で習った日本史の知識が蘇った。火薬製造に欠かせないものとして宋に輸出されていた硫黄は、この島のものであったと考えられているようだ。座学の日本史が、急に現実味を帯びる。実はこういった経験は、初めてではない。

学部3・4年生の時、課外活動で5度ほど行かせてもらった喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）に、「俊寛の墓」があったのだ。俊寛といえば、鹿ヶ谷の山荘で平清盛討伐の密議をおこなっていたとして流罪に処された僧侶であると、高校の日本史で習った。島の歴史に明るい地元の方に「俊寛の墓」の真偽を尋ねても定かでないとの返答だったが、「この島だったのかもしれないのか…」と思うと、感慨深いものがあった。

硫黄島は別名を「鬼界ヶ島（きかいがしま）」という。こちらにも俊寛ゆかりの史跡が存在し、歌舞伎「俊寛」が、今は亡き18代目中村勘三郎により実際の船上で演じられたのも記憶に新しい。私が鹿児島県の離島で唯一訪れたことのある2島は、偶然にも、歴史上の同一人物が骨を埋めたとされる島なのであった。

とはいえ、2島はあまりにも異なる。比較してみるとにより、有意義な知見を得ることができた。ここでは教育を切り口にしてみる。

三島村には中学校までしかない。つまり、高校等へ進学したい生徒は、必然的に島を離れなければならない。三島小中学校は硫黄島唯一の学校で、それぞれ6名ずつの12名が通う。柏木先生に詳しくお聞かせいただいた小学校の方は、1・2年生と5・6年生が複式学級、3年生が児童と教員のマンツーマン授業をおこなっている。「しおかぜ留学」制度により島外から児童を受け入れており、可能な限り児童のいない学年を設けないことで、教員数を確保する工夫がなされている。時に事情を抱え「しおかぜ留学生」として転入学する児童がいるそうだが、清掃活動など自尊感情を高める独自の教育カリキュラムによって、その子らしさや明るさを取り戻すそうだ。

一度は「島立ち」する子どもたちだが、やがては戻ってくるような教育をおこなっていると柏木先生がおっしゃった。この点につき、慎重に話を伺う必要があると直感した。それは、私自身が喜界島で得た「島を離れるかどうかはその人の幸福の価値観に従い自由であり、幸福実現のために必要とされない島は衰退してやむを得ない。しかし、将来的に島に戻りたいと思う人の選択肢を確保すること

⁵ ほかに厚労省「地域提案型雇用創造促進事業」など。

は、その人自身の生き方や幸福の根幹部分を守る意味で非常に大切である。それゆえ、島の将来を大人たちと子どもたちが真剣に考えることが重要である」という着想からである。

喜界島（平成 26 年 7 月 1 日現在の人口 7440 人）には県立喜界高校（平成 25 年度の全校生徒 206 人、各学年に普通科と商業科）がある。連携型中高一貫教育校として実質的な中高一貫制がとられ、島外からの入学志願者は無い。卒業後にほとんどの生徒が進学や就職のため島を離れるのだが、鹿児島市内で育ち、小学校から高校まで進学した私にとって、ある年齢に達することが故郷を離れるのを意味する地域があるということに、強い衝撃を受けた。船長を当惑させてしまった問いではないが「生徒はどんなことを考えているのだろうか？」と、「喜界島の現状と課題」「TPP が喜界島に与える影響」「高校生の離島理由と U ターン条件」につき全校生徒を対象とした量的調査、うち 6 名を対象とした質的調査を平成 25 年度に実施した。そこから得られた結果を手掛かりに、喜界島の「みらい」について、高校生と島の大人と「よそ者」の大学生が話し合う「喜界島みらい会議」を開催したのだが、会議中も事前取材中も、喜界島の大人たちから子どもたちに対し、島に戻ってきてほしいと強く求める声は聞かれなかった。帰ってきてくれたらうれしい、その程度だった。高校生の意識はというと、島を離れなければならない現状に疑問が無く、むしろ人生にとってプラスになると受け止めているのが多数派であった。

私の故郷は、鹿児島市だ。一度は鹿児島を離れたが、故郷を恋しく感じたことは無く、鹿児島に暮らす現在も年に数回あるかないかの「ある瞬間」を除いては、故郷のありがたみに浸れない。他県の人に鹿児島のことを話すとき、残念な部分が先に浮かぶ。ネガティブな発言は喉元で押しとどめるが、「良いところですよ」と言えない自分のことも、残念に思う。

柏木先生は、故郷への誇りはその人自身の誇りに繋がるとの考えをお持ちだ。しばしば自らを「根なし草」と称し、アイデンティティを問いつける人々をテレビ等で見るが、この辺りとも関連があるのだろう。先生はさらに、子どもたちが島に戻ってくることは硫黄島発展の十分条件であるとお考えだ。もっと言うと、特殊メイク技術でハリウッドをはじめ引く手あまたである沖縄在住の兄弟を例にとり、硫黄島という地理的不利をも排して強く必要とされる人材の育成こそを究極の目標となさっていた。個人（子ども）と島両方の発展を実現するべく島内外にアンテナを張り、ご自身からの情報発信にも熱心だ。どのタイミングでそのような意志を持たれたか尋ねると、離島に赴任したことが契機であったと話された。

私はある島の居酒屋で、教員が「こんな島、早く出たい！」と叫んでいるところに居合わせたことがある。その人の本心に違いないから気の毒だと思ったが、その叫びを否応なしに耳にしている居酒屋の従業員や地元客（もしかするとその学校に子どもを通わせる親）の心情を慮らずにはいられなかった。鹿児島県には離島が多いため、教員採用に際し離島への転勤の可否が問われ、ごく稀なケースを除き、首を縦に振る者しか採用されないようになっているらしい。ある年齢に達したら島を離れなければならない子どもたちがいる。ある職に就くと島に住まなければならない大人たちもいる。島での生活において「本土に帰るまで」カウントダウンし続ける教員は少なくないようだが、そのような内心の「先生」と一日の大部分を過ごす子どもたちの中に、故郷への誇りは構築されるだろうか。

柏木先生の話では、複式学級での指導方法に先生方は初め、戸惑うそうだ。そもそも指導方法自体が、教員免許を取得するまでに習得すべき事柄として教えられないという事実、私は驚いた。教育をはじめとするあらゆる全国一律の仕組みは、いつも離島を「例外」とする。次に続く医療も、ある意味そうだ。

3. 診療所（医療）

港を望む俊寛像の面持ちは実に悲痛で、無念さや孤独さを湛えているが、すぐ後ろにたつ「三島開発総合センター」は、人の行き交う場所である。2 階で鬼界カルデラのジオラマなどを見せてもらった後、1 階にある「硫黄島へき地診療所」を訪ね、島でたった一人の看護師、大町智美さんに話を伺った。

大町さんは今年 4 月に赴任され、レセプト（患者が受けた診療について、医療機関が市町村や健康保険組合等といった保険者に請求する）業務や薬の調合、社会保障給付に係る書類管理といった掛け持ちの仕事を覚えることに苦心していらっしやう。島内にいる間は常に連絡がつく状態にしておかなければならず、やむを得ず島外に出る場合には、役場に申請し、代わりの看護師に来てもらうそうだ。無論、代わりが見つからないと、島外へ行けない。

常駐の医師はいない。鹿児島赤十字病院から 3 か月ごとに異なる科の医師が派遣され、数日間の診療をおこなう。ここでは、緊急性を要する事態に力を発揮する「遠隔医療システム」と「ドクターヘリ」について記す。

「遠隔医療システム」は、村内の各診療所、本庁民生課、鹿児島赤十字病院にテレビモニターを設置し、診療はもちろん、各種相談や保健指導等に役立てようというもの。外傷や発疹等の画像を鮮明に映し出すことができ、遠隔での診断も可能だ。三

島村がこのシステムを導入したのは平成 23 年度、「特定離島ふるさとおこし推進事業」の活用による。安否確認が必要な高齢者世帯との日常的・緊急時の通信をおこなう「遠隔みまもりシステム」も同時期に導入された。いずれもブロードバンド化の賜物である。



必要最低限のものが備わっているだけの小さな診療室で、遠隔医療システムのための装置(左の画像⁶⁾)が異彩を放っていた。渡航の数週間前、私は深夜に救急車で運ばれた。もし硫黄島でそうなら、熟睡中の大町さんに目覚めてもらい、この装置の前に運ばれうーうー唸っていたのだらう。大町さんのプレッシャーは大きい。前の職場で携わっていた栄養食事指導を硫黄島で取り入れる意欲をお持ちだが、今はそれどころでないとのことだった。

「ドクターヘリ」は、医療機器や医薬品を搭載した救急医療専用のヘリコプターである。専門の医師と看護師が搭乗して救急現場に急行し、現地で治療を開始するとともに、いち早く医療機関へ搬送することができる。鹿児島県では 2011 年 12 月 26 日に運用が開始され、県本土と甕島や熊毛地区、三島村、十島村の一部と鹿児島市立病院を結んでいる。鹿児島市の浜町ヘリポートから三島村のランデブーポイント(薩摩硫黄島飛行場・三島開発総合センター・三島小中学校)は 20 分圏のやや外側にあり、同ヘリポートから市立病院は 5～7 分⁷⁾。どんなに急いでも 1 時間弱かかる。

ドクターヘリは夜間⁸⁾や視界不良の場合、飛ぶことができない。道路を優先的に走行してわずか数分で駆けつける救急車とはわけが違う。このあと同センターのロビーで話を伺った民生委員・村議会議員・漁師・消防団の副団長・フェリーと港をロープで繋ぐ役の長濱義人さんが「間に合えばいいんですけどね」とおっしゃった時の曇った表情が、多くを物語っていた。

入院や高度な医療が必要になれば、島を離れなければならない。茶毘に付するのも、島外だ。重篤なケースだと、本土ならば助かっていたあるいは後遺症が軽く済んだかもしれないと悔やまれることがあるに違いない。私の祖父(長崎県五島列島)が脳梗塞で倒れた時、どこにもぶつけようのない悔

しさに涙が出た。

利便性や安心を求めて住まいを移すのも選択肢の一つであるが、そうでない場所に住む人たちに自己責任のごとき覚悟や諦めを強いる意見には、全く賛同できない。三島村に少なくとも一人は医師が常駐するべきだと考える。

平成 24 年の統計によると、鹿児島県全体の人口 10 万人あたりの医師数は 250.1 人で全国平均 237.6 人を上回り、都道府県別に見ると多い方から 20 番目である。しかし二次医療圏(一般的な入院医療への対応を図り、保健・医療・福祉の連携した総合的な取り組みをおこなうために市町村域を超えて設定する圏域)ごとにみると、鹿児島医療圏(鹿児島市・いちき串木野市・日置市・鹿児島郡)を除き、いずれも全国平均を下回っている。これは、離島・へき地を多く有する本県の地理的要因により、地域間で医師の偏在が見られることを示す⁹⁾。

本県全体の医師数をもとに 372 人(三島村人口)あたりの医師数を単純計算すると 0.93 人となるが、この数字が三島村に常駐の医師がいないことを正当化すると見るか、高齢化率 30.4% (平成 22 年 10 月 1 日現在)とこれまで述べてきた地理的不利の事実を併せ、医師ゼロ解消のための根拠とするか。私は後者である。現に、鹿児島医療圏の人口 10 万人あたりの医師数 359.6 人と三島村人口で計算すると、三島村に 1.34 人の医師がいておかしくない値となる。若い世代を島に呼び込みたいのなら、子育ての不安を解消するためにも、医師ゼロ解消の必要性は尚のことである。

4. まとめ(提言)

わずか 20 時間ほどの滞在時間で提言をおこなうのは非常に辛いものがあるが、まず率直に、硫黄島(三島村)は、がんばっている¹⁰⁾!

今回はずっと案内人の日高さんのお世話になり、自分たちの力で移動しなかったことに加えアポイントをとった方々にのみ話を伺ったため、どちらかというとも良い面を多く見聞きした気がしている。それでも、鹿児島市の子どもたちと保護者を対象にした体験ツアーを催したり、「しまかぜ留学生」の成人式をおこなったり、ジャンベ留学生や地域おこし協力隊として若者を受け入れるなど、「(一時的にでも)帰りたい場所」としての存在感を失わない姿勢に「がんばっている!」と感じた。

⁶⁾ 広報みしま No.475 (平成 24 年 4 月号) から転写

⁷⁾ <https://www.pref.kagoshima.jp/ae01/kenko-fukushi/kenko-iryu/kikan/chikiiryu/doctorheli.html> (2014 年 7 月 10 日閲覧)

⁸⁾ 夜間は県消防・防災ヘリコプターや海上自衛隊救護ヘリコプターが対応。

⁹⁾ <https://www.pref.kagoshima.jp/ae03/kenko-fukushi/doctorbank/taisaku/ktiikiiryu1.html> (2014 年 7 月 11 日閲覧、以下同様。)

¹⁰⁾ 「上から目線」じゃないのです。本当にすごいと思うのです。



野生化した孔雀、むき出しの硫黄と地層、強酸性の露天風呂など、島全体がまるで博物館のようである。水産資源や地

熱資源を含め、この島の豊かさを活かすために何が必要か。

まず一点目に、専門性を有する人材の確保である。今回は残念ながらお目にかかれなかったが、三島村はジオパーク構想実現のため地質学の専門家を村職員として迎え入れており、専門ガイド育成や情報発信、地質学的価値を存分に伝えるイベント開催などに百人力を発揮している。いわゆるシロウトがどんなに協力し合い知恵を絞りだしても、越えることのできない壁はある。これを突破した瞬間に事がうまく大きく回り出す場合があり、そこでの原動力として、明確な意志を持ったシロウトの力と地域ネットワークは欠かせない。

しかしながら、財政の厳しさからして、職員数を増やすことには限界があるだろう。ならば、現行のU・Iターン促進制度に、ある一定の専門性を有する移住希望者への優遇措置を追加してはどうか。

現在、三島村は「三島村に移住し、村で農業・水産業等の自立又は自営の目的をもって生活、村の活性化に寄与しようとする者を援助するため」の定住促進対策事業を実施している¹¹。「1. 1人世帯の場合月額85,000円以内、2人世帯の場合(配偶者を含む)月額100,000円以内。2. 第1子については20,000円を第2子から1人につき10,000円を加算する。」という内容の「助成金」を3年間を限度として支給しているほか、1回限りで「1. 支度金としてフェリーみしまの航送料か100,000円のいずれか低い額を支給する。2. 報償として50万円又は子牛1頭を支給する。」としている。破格の好待遇に驚いた。

家族構成や「移住希望者の帰郷及び移住を希望する理由」、「今後の生活設計又は、事業計画及び資金計画」の審査がおこなわれ、「(定住促進対策事業)要綱を適用することが適当であると認められ」と「移住承認」が得られる。この制度を実際に利用した人が移住前に有していたスキルや専門性、移住後の実態等につき聞き取りをおこなわなかったもので具体的な運用にまで言及できないのが残念だが、たとえば農業に従事した経験のある移住希望者へ助成金を上乘せする旨の規定を設けておけば、村にとっては、農業の専門性を有する人材を呼び込むことができるほか、農業指導にかかる負担が少なく済むメリットがある。移住者としても、自らが思い描く島での農業実現のため、金銭的な後押

しが得られる。更にそういった人々は、次なる移住希望者へ説得力のあるアドバイスをおこなえるリーダーとしての素質が備わっていることが見込め、そうしたやりとりは、地域での信頼獲得を促すことだろう。現状だと、食品加工や観光の分野で専門性を有する移住者が増えてほしい。

第二点目に、地域おこし協力隊やジャンベ留学生を含む移住者の発言力と、もともと村に住む方々の発言力のバランスをうまくとることである。私はそれぞれの本音を聞いていない。だがジャンベ体験をさせてもらっている時、スタッフの中にずっと暗い表情の方がいらっしゃることに気づいた。フェリーを見送る演奏の際にも暗く、心配になった。理由はわからないし、三島村移住とは関係のないことで悩んでいたのかもしれない。しかしながら、そうした若者が村から支援を受けながら生活しているという事実と、村の地域おこしのための支援を目的の一つに移住してきたというベクトルの異なる両事実のはざまに、実は難しい立ち位置にあるのではないかと、どこかしら主張を控えている場面があるのではないかと考えを巡らせるきっかけとなった。

「移住」という選択肢は、移住者の生き方ないし幸福実現の手段であるということを見失ってはいけない。それが結果として地域活性化に繋がろうが、究極的な価値は個人の幸福追求にある。移住者はなぜその地域にやってくるのか、その地域はなぜ移住者を増やしたいのか。共に暮らす者どうし共通の幸福があるはずで、それを実現するための立場を超えたやりとりを躊躇すべきではない。地域としての魅力的な個性を住民が自覚し発信することで、一人一人の自己実現に適した暮らし方を提示できる説得力のある地方こそが今後発展していくのである。

硫黄島の魅力がより多くの人に受け入れられ、盛んな交流がこれからも続き、島立ちする子どもたちが誇りとする故郷であり続けてほしいと切に願う。

5. お礼の言葉

おいしいお刺身と燻製を食べさせて下さった長濱さん、お話を聞かせて下さった柏木先生と大町さん、急なお願いに応じて下さった「みしまⅡ」の船長さん、ジャンベ演奏でワクワクさせて下さった皆さん、それから案内役の日高さん、本当にありがとうございました。短い滞在時間でしたが、硫黄島で得られた濃密で貴重な経験を糧にしながら、大学院生活を送って参ります。そして、釣り好きの父を伴い、また必ず硫黄島を訪れたいです。

¹¹ <http://mishimamura.com/livinginfo/494/>